

32 脊髄損傷者のヘルスリテラシーの様相

— 受傷後 16 年～55 年経過した 5 名の語りから—

看護部 外来・健康管理室 吉田 尚子 大島真理子

I. 目的

本院外来では、受傷歴の長い脊髄損傷者（以下、脊損者）に対し、健康管理上の指導や情報提供をおこなうことがある。その場面で自身の健康問題や 2 次的疾患のリスク、治療などについて新しい情報を得られていなかったという、ヘルスリテラシーの低さが顕在化する。医療情報が目まぐるしく変化し、専門家にとっても正しいと思われたエビデンスが明日には変化する可能性を常にはらんでいると言われる中で、外来患者への情報提供の在り方について、具体的方策を見出す必要がある。その足がかりとして、本研究では受傷後 16 年～55 年経過した 5 名の脊損者のヘルスリテラシーの様相について明らかにする。

*用語の操作的定義：ヘルスリテラシーとは、『自己の健康維持管理に関する適切な情報を得る能力、情報を得たことで意識変容し、実行に移すことができる能力』とする。

II. 研究方法

1.研究デザイン：質的記述研究、2.研究参加者：5 名（40 代後半～70 歳代、女性 2 名）
3.データ収集：調査期間 2013 年 8 月～10 月、非構造化インタビュー、4. データ分析方法：現象学的アプローチを参考とする。5. 倫理的配慮：2013 年本院倫理審査委員会の承認を得た。また研究参加者に対し、研究の主旨と方法、参加及び中断の自由、プライバシーの保護について説明し承諾を得た。

III. 結果

記述データの一部を引用し、その内容を特徴的に表現している参加者の言葉から 12 のコードを抽出し、そこから 7 つのサブテーマ、3 つのテーマを導き出した。（表 1 参照）

IV. 考察

1.情報との距離を生む背景—1) ヘルスリテラシーの低い高齢脊損者に対し、その意思決定に役立つ情報提供のあり方が問われている。2) 習慣化が自らの行動を見直すきっかけを持つことを困難にしている。3) 自身にとってそれが有効な情報であると注目させる事ができる、わかりやすい情報提供の在り方が課題である。**2.きっかけからの意識・行動変容の困難さ**—1) 行動変容を促す指導には、伝達内容、手段選択の課題に加え、きっかけを得て取り組み始めた事が持続できるための課題、2 つの側面がある。2) 障害があること、それが皆微妙に違うという認識、既に自身のスタイルがある、という意識や動かしがたい有り様が、情報受入れ判断の根幹で影響している。**3. 行動の変化に影響を及ぼすエネルギーの存在**—1) 情報過多や知識不足に悩む受傷歴の浅い脊損者のピアサポートの経験は、ヘルスリテラシー向上に大きな役割を担い、エネルギーになる。2) 必要性や有効性は承知していても、新しい取り組みが今の精一杯の生活に与えるマイナス影響への懸念が、行動変容を踏み止まらせている。

V. 結論

ヘルスリテラシーの課題は、個人のスキル向上にだけ責任を負わせてはならないと、いわれており、医療の場である病院での情報伝達環境作りが今後の至要課題として課せられている。

表 1 脊損者のヘルスリテラシーの様相

テーマ	サブテーマ	コード
1. 情報との距離を生む背景	1) 情報ニーズの多様さ	[情報発信は病院から] [情報なんて無かった]
	2) 健康・医療情報と コミュニケーションの難しさ	[ずっとよくわからないで病院にかかった] [よそじゃ通じない]
	3) 多様化し変化する情報からの 置いてきぼり状態	[何が新しい事なのかわからない] [情報からの置いてきぼり]
2. きっかけからの意識 行動変容の困難さ	1) 経験をきっかけとした意識・ 行動変容	[自分のスタイル] [ならないとわからない] [忘れちゃうんだよ]
	2) 誰もが違う微妙なバランス	[あなたと私は違う]
3. 行動の変化に影響を 及ぼすエネルギーの存在	1) ピアサポート	[ひとりじゃない] [横の繋がり希薄さ]
	2) 健康に影響する個人の 行動と環境	[情報を取り入れるゆとりと仕事] [治療後のリハビリの重さ]